

子どもの本

研究会

【私の一冊】

小池光歌集「思川の岸辺」

橋元 俊樹

この欄に、歌集を紹介するのは、あまりふさわしくないかとも思ったが、この歌集なら多くの人の共感を得るのではないかと思つて敢えて紹介することにした。

作者の小池さんは、今年七十歳になった。元高校教師である。この歌集は彼の第九歌集で、二〇一五年に刊行された。この歌集を取り上げた最大の理由は、この歌集には癌で最愛の妻を亡くした前後の歌があるからだ。題になった「思川」は栃木県にある川で渡良瀬川と合流するという。作者はこの川の辺りをよく歩いたという。

では歌を挙げていこう。

癌を病む母に見せむと結婚式ひたいそぎたるふたりのこころ

この歌は娘の結婚式の日に作られた。この前に「ウエディング・ドレスまどひて志野が来るこの現実をなんとおもはむ」彼には二人の娘があり、夏と志野という。母が生きているうちにと、二人とも結婚式を急いだのだ。二人の娘を一挙に失う父親の気持ちを「なんとおもはむ」と表現した。

お父さん、とこゑして階下になりゆけば夕焼きれいときみは呟く

妻は多分ベッドから夕焼を見ていて夫に声をかけたのであろう。

この後は妻を亡くした後の歌。その愁嘆、悲哀は胸に迫る。

わが妻のどこにもあらぬこれの世をただよふごとく自転車を漕ぐ
鏡台に立てるこまごましき燻類のひとつひとつがわれを見ている
亡くなりてきみ五月とされる間にありとあらゆることが起きたり
ああ和子悪かつたなあどこぞに出て部屋の中真ん中にわが立ち尽くす
思川の岸辺を歩く夕べあり幸うすかりしきみをおもひて

(歌誌「稜」編集・発行人)